

〈今月の紙面〉

- ・全国開拓者大会関連記事 (2面)
- ・「食料・農業 知っておきたい話」-28- (3面)
- ・13年農業経営動向分析 (4面)
- ・ネギ 定植前苗にリン酸施用 (5面)
- ・開拓地訪問 (北海道天塩郡豊富町) (6面)
- ・13年度畜産物生産費 (7面)
- ・畜産物需給見通し (8面)

開拓情報

発行所
 公益社団法人全国開拓振興協会
 〒107-0052 東京都港区赤坂1-9-13
 TEL 03-3586-5843
 FAX 03-3586-5846
 ホームページ http://www.kaitakusya.or.jp
 全日本開拓者連盟・全開連・全国開拓振興協会共同編集

畜産・酪農経営の危機打開へ

緊急畜産経営危機突破 全国開拓者大会を開催

国内農畜産業は、近年の飼料・燃料等生産資材の高騰に加え、日豪EPA(経済連携協定)の妥結やTPP(環太平洋連携協定)交渉の問題など、かつてない危機的状況に直面しているとして、全日本開拓者連盟・全国開拓者協連・全国開拓振興協会の開拓中央三団体は11月20日、東京・大手町のKKRホテル東京で、「緊急畜産経営危機突破全国開拓者大会」を開催した(写真左)。全国の開拓者、青年・女性代表者ら130名が参加し、TPP交渉への厳格な対応と畜産・酪農の生産基盤強化を国に求める決議を採択した。翌21日には代表団が農水省を訪れ、決議の実現を要請した。

大会は、会場に「TPP たる姿勢で国益を守り抜く 化対策を早期に実現させよう」などのスローガンを掲げ、全日本開拓者連盟青年部長中村博行さんの宣言により開会。同部長は、「今直面している農業危機を何としても乗り越え、開拓者が一層発展させ、次世代を担う若者が農業に夢を持てるよう、一致団結して、一層強固になり、開拓者同士の連携を強化し、TPP交渉の進展を早期に実現させよう」と述べた。



例年、全国開拓青年・女性研修会を各ブロック持ち回りで開催しており、また3年に1回の割合で全国開拓代表者大会「緊急畜産経営危機突破」を開催しておりますが、

西谷大会運営委員長挨拶

さて本年は、関東東海における豪雪被害に始まり、広島県他での豪雨土砂災害



開会を宣言する中村博行連盟青年部長

「生産資材の高止まりと消費回復の鈍化に加え、TPP交渉の問題で、生産者が危機的状況に立たされている」と危惧を表明し、「TPP交渉は、食料安全保障の見地からも安易な妥結は許されるものではない。この大会を通じて開拓者が一致団結して、一層強固になり、開拓者同士の連携を強化し、TPP交渉の進展を早期に実現させよう」と述べた。



力強く「がんばろう!」を三唱

来賓挨拶は、自民党衆議院議員の坂本哲志氏(熊本3区・当選4回)から受けた。党の畜産・酪農対策小委員会委員長を務める同議員は、「非常に厳しい畜産・酪農の情勢が続いている。安定的な経営のための予算措置を早急に講じなければいけない。皆様方の現場の意見、要望をぜひ寄せたい。TPPは、必ずしも交渉にない農産品5品目を守るとして、国益のためには、TPP交渉は厳格に守らなければならない」と述べた。

決意表明文

われわれ開拓者農畜集団は、わが国における食料自給率の維持向上と食料安定供給に多大な貢献をしております。今後の日本農業の先導的役割を果たす重要な存在である。いま、われわれが直面しているわが国農業存続の危機を何とか乗り越え、国民へ安全で安心できる食料を届けるために、われわれ農業経営の維持発展を確保しなければなりません。

われわれは、専業農家集団である開拓農家の一員として、全国開拓者協連の一層の発展を図り、日本の農業を守り、次世代を担う若者が夢を持てる農業作りのため、一致団結して闘うものである。よって、本日決議した諸事項の実現をはかり、安定した農業経営ができるよう全力で勝ち取ることを誓い、本大会の下に決意表明する。

団結して開拓 営農の発展を

また、まさに重大局面を迎えているTPP交渉で、日米協議は厳しい状況にあり、早期決着を優先する必要がある。このような情勢下、国内農畜産業は、生産資材の高止まりと消費回復の鈍化も重なり、その経営基盤は危機的状況にあります。

衆参両院の国会決議は、断固守り抜かなくてはなりません。

先程、青年部長の宣言にありましたように、戦

本紙は無償で提供しています。ご希望の方はお知らせ下さい。

緊急産産経 高危機突破 全国開拓者大会における決議事項

第1号議案 TPP交渉への厳格な対応に関する件

1 提案の趣旨

政府は昨年3月、TPP交渉参加を正式決定し、参加各国との多角的交渉を本格化させるなか、本年に入り、年内合意を目指すべく本協定のまことに要となる日米協議が急速に進行し、その核心部分での厳しい交渉を展開している。

2 要望決議

TPPは、わが国農業の多面的機能や国内自給の増大や地域紛争の拡大等、極めて不安定な国際環境下、わが国の安全・安心な食料の安定供給体制の維持は、国の安全保障上の要であり、国土保全や活力ある地域農業経営の復興を目指す観点から、本交渉への厳格な対応は国の重大な責務である。

第2号議案 国内畜産酪農の基盤強化対策に関する件

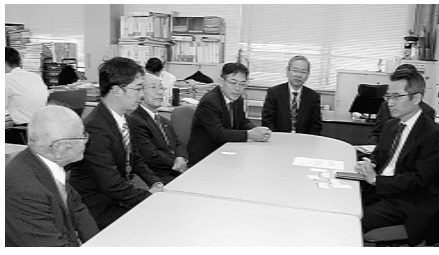
1 提案の趣旨

国内の畜産酪農は、近年の飼料・燃料・素牛等の生産資材の高止まり、物流コストの上昇等による経営圧迫に加え、農家戸数減少による生産量の低下等、生産基盤の弱体化が進行しており、経営安定対策と並行し国内生産基盤の早急な強化対策が求められている。

2 要望決議

国は「農業・農村所得倍増目標10ヶ年戦略」を策定し、来年度予算で、畜産酪農の生産力強化、生産拡大対策等の追加対策を措置したが、自給飼料の基盤整備、酪農・肉牛生産体制の維持強化、後継者対策等、実態に即した支援措置の強化により、生産基盤の急激な減退を回避することは、国内肉牛生産の経営安定化と共に喫緊の課題であり、マルキン制度や配合飼料基金制度の安定的財源確保とあわせ、その迅速な対応が必要不可欠な状況にある。

決議携え農水省に要請 大会運営委員長ら



水野課長(右)に要請する西谷委員長ら代表団

11月21日、西谷悟郎大会運営委員長(全日本開拓者連盟委員長)ほか大会運営委員長ら代表団が農水省生産局畜産部を訪れ、水野政義畜産企画課長に大会決議を手渡し、実現を要請した。

水野課長は、「生産基盤の強化のため来年度予算の確保に努めたい。また、今年度策定する酪肉



右から松尾・太田の両連盟青年部副部長

近基本方針は、しっかりとした方向性を打ち出したい」などと述べた。

全国開拓者大会における意見表明(要旨)

青森県・酪農

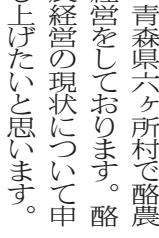
木村 晃さん



青森県六ヶ所村で酪農経営をしております。酪農経営の現状について申し上げたいと思います。酪農を営むにあたり、エサの価格は高い、しかし、乳価は安い、そのことで、経営が非常に圧迫されていると感じております。エサの価格が高いからといって、供給量を減らしては生乳の出荷量に影響を及ぼすため、簡単に費用の削減を行うことはできません。かといって、高いエサを購入し続けることは自分の経営を苦しめることになりま

因の一つとなっているのではありませんか。個人の努力で経営を良くできればいいのですが、それにも限界を感じています。コスト削減や労働時間の短縮のため、TMRセンターやコントラクターを私たちが十分活用できるよう、また、酪農ヘルパーを充実させることに力を貸していただきたく思います。

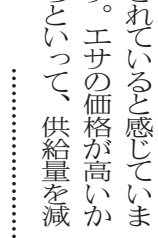
近年、酪農に関する補助事業が増えていますが、直接、生乳の出荷や飼料の購入に対し助成がでないものかと思っております。



また、酪農にかかわらず農業全体へのイメージとなるかと思いますが、きつい、きたないなどのマイナスの感情を抱く若者が多く、後継者や新規参入者の確保がうまく行っていないと感ずいております。エサの価格が高いからといって、供給量を減らしては生乳の出荷量に影響を及ぼすため、簡単に費用の削減を行うことはできません。かといって、高いエサを購入し続けることは自分の経営を苦しめることになりま



鹿児島県志布志市で、交雑種牛の肥育事業を営んでおります。東日本大震災の影響も薄れ、相場は徐々に回復してきたものの、生産原価の高騰が相場回復を上回り、生産者の実質負担は、これまでの最高額となつております。このため収支がともなわず、金融機関からの資金調達も困難な状況となっております。一部には、経営を断念せざるを得ない仲間もいます。



本年は、中国での鳥肉加工工場でのさまざまな衛生管理の状況が明るみになり、食品安全の信頼性に関する問題が再び発生しました。同じ食品に関わる者として、繰り返し起こるこうした問題に大きな憤りを感じています。栃木県開拓者連盟事業協

鹿児島県志布志市で、交雑種牛の肥育事業を営んでおります。東日本大震災の影響も薄れ、相場は徐々に回復してきたものの、生産原価の高騰が相場回復を上回り、生産者の実質負担は、これまでの最高額となつております。このため収支がともなわず、金融機関からの資金調達も困難な状況となっております。一部には、経営を断念せざるを得ない仲間もいます。

また、政府は大規模農家育成を前提にいろいろな政策を組んでおられ、私たち零細農家を切り捨てようとしているのではないかと思えません。これからのようにして、生計を維持していけばよいのではありませんか。私たち農業者にとっては死活問題です。



開を進め、さらには、非遺伝子組換え及びボストトハーベストフリー飼料、飼料用米の取り組みなどを全国に先駆けて推進し、より進んだ製品の「安全・安心」を追求してまいりました。生産者と消費者との信頼関係は生産費補償方式の仕組みにも支えられ、より強固なものとなり、安定した経営につながっています。加えて、私たちは、家畜保健衛生所の協力も得ながら、農場HACCP方式による衛生管理の構築を進めています。昨年より国内でPEDが発生し、また口蹄疫についても周辺各国ではいまだに

も、「自由化」の名のもとに破壊されてしまうのではないのでしょうか。政府にはあらためて、「TPP交渉に関する国会決議」の遵守を求めるところです。

また、政府は、大規模農家育成を前提にいろいろな政策を組んでおられ、私たち零細農家を切り捨てようとしているのではないかと思えません。これからのようにして、生計を維持していけばよいのではありませんか。私たち農業者にとっては死活問題です。

このような中で、本年4月に合意した日豪経済連携協定(EPA)は、

このような中で、本年4月に合意した日豪経済連携協定(EPA)は、

このような中で、本年4月に合意した日豪経済連携協定(EPA)は、

このような中で、本年4月に合意した日豪経済連携協定(EPA)は、

食料農業 知ってほしい話

第28回

バター不足の意味すること

東京大学教授 鈴木宣弘氏



長期的な酪農所得の低迷

今回のバター不足の背景には、酪農家の所得が十分に確保できない状況が長年続いて...

不安が顕在化する以前の2000~2005年のデータでも、かなり大規模層でも生産...

需給調整機能の負担

さらには、欧米では、政府が乳製品の市場価格が低下した経営の分を残った経営の生...

小売からの川上部門へのしわ寄せ

また、諸外国のように政府が最低限の需給調整機能を負担し、多様な販売先、「出口」...

将来計画が立てられる最低限の経営安定メカニズム

政府は、現場の苦境を救い、TPP不安を払拭するためにセアニアの供給拡大の余地は...

今が現場の踏ん張りどころ

一方、乳製品の国際需給は、近年逼迫の度を強めており、新興国の牛乳・乳製品需要の...

各地で高病原性鳥インフル検出

冬の渡り鳥の飛来シーズンに入り、各地で野鳥のふんなどから、高病原性鳥インフルエンザウイルスが検出されている。

インドネシアへの牛肉輸出解禁

農水省は11月26日、インドネシアへの牛肉輸出解禁のための検疫協議が...

14年度天皇杯

佐藤宏弥さんが講演

耕畜連携で水田有効活用

茨城県・大八洲開拓の佐藤宏弥さん(写真)が11月28日、都内で開催された農研機構畜産草地研究所主催のシンポジウムで講演し、耕畜連携による取り組みなどを語った。



シンポジウムは、「牛の栄養に関する研究と今後の方向性」をテーマに肉用牛の栄養生理に関する研究の知見を整理し、

固定的補給金の限界

その根本原因の一つは、我が国では、加工原料乳に生乳1キログラムあたり10円程度の固定的な補給金が支払われるのみ...

需給調整機能の負担

さらには、欧米では、政府が乳製品の市場価格が低下した経営の分を残った経営の生...

小売からの川上部門へのしわ寄せ

また、諸外国のように政府が最低限の需給調整機能を負担し、多様な販売先、「出口」...

長谷部さん(宮崎)に特別賞

全国優良畜産経営管理技術発表会

公益社団法人中央畜産会主催の14年度全国優良畜産経営管理技術発表会が11月14日、都内で開催された。最終審査の8事例の発表が行われ、最優秀賞4点と優秀賞4点が選ばれた。

共進会等の結果

10年4月の宮崎県における口蹄疫発生により、長谷部牧場(児湯郡高鍋町)は飼養牛全頭を処分せざるを得なかった。口蹄疫終息後、同年11月から繁殖牛、子牛を導入し、黒毛和種13頭の計70頭が...

乳用種部門

黒岩 優(宮崎) 交雑種部門 荒木敏雄(肥後) 黒毛和種部門 牧原 保(薩州)

開拓牛友の会東北支部

進会(交雑種) (12月1日・福岡食肉市) 枝肉研修会(交雑種) (11月28日・スターゼン場) (11月28日・スターゼン場) (11月28日・スターゼン場) (11月28日・スターゼン場)

肉牛部門

黒毛和種 黒毛和種 黒毛和種 黒毛和種 黒毛和種 黒毛和種 黒毛和種 黒毛和種 黒毛和種 黒毛和種

農研機構東北農業研究センター
ネギ 定植前苗にリン酸施用
ほ場50%減肥で収量同等

国際的な肥料の需要増などにより肥料原料の価格は不安定化しており、それに対応した減肥栽培技術の実用化が喫緊の課題となっている。露地野菜栽培に対応したリン酸施肥低減技術として、定植前リン酸苗施用がある。

農研機構東北農業研究センターは、同技術を用いてネギ栽培での技術の効率化と適用条件を検討した。

定植前リン酸苗施用の手順方法

苗をリン酸濃度1.15%のリン酸カリ溶液に浸漬してから定植する。小規模な場合には、リン酸カリ溶液をコンテナに入れ、大規模で効率的に行う場合にはエプ&フロー装置などを用いる。浸漬時間は用土が湿る10分程度で、チェーンポット苗の場合、育苗箱当たりの吸収量は最大で3Lである。ほ場へのリン酸施用量2.45g/m²に相当する。

主な特徴

3月中旬播種、5月中旬定植、9～10月収穫の作型では、緩効性肥料を全量基肥で条施用した場合、定植前リン酸苗施用により、初期生育が顕著に促進される(図1)。収穫時まで効果が持続しており、収量が増加する。リン酸無施用でも、定植前リン酸苗施用を行うことにより、慣行並みの収量が得られ、50%以上のリン酸減肥が可能。

また、定植期が低温になる夏どりの作型でより効果的。3～5月定植・7～9月どりの作型では、定植前リン酸

苗施用によって有意に収量が増加するが、6月定植・11月どりの作型では、やや効果が劣る。定植前リン酸苗施用を行うことにより、リン酸と同時にカリも50%程度削減しても、慣行に比べ収量が減少することなく、減肥が可能(図2)。

底面給水装置などの導入の場合を除き、同技術のために別途必要になるのは、定植前リン酸苗施用の肥料費、浸漬用資材費および労力。10a当たり1.5～3時間ほど労働時間が増加する一方、収量の増加にともない収入の増加が見込まれ、ほ場へのリン酸肥料を削減すれば、肥料費の節減が可能。

同センターは、同技術を活用するこ

図1 定植前リン酸苗施用がネギの初期生育と収量に及ぼす影響 (慣行:P苗施用なし・リン酸施用量100%)

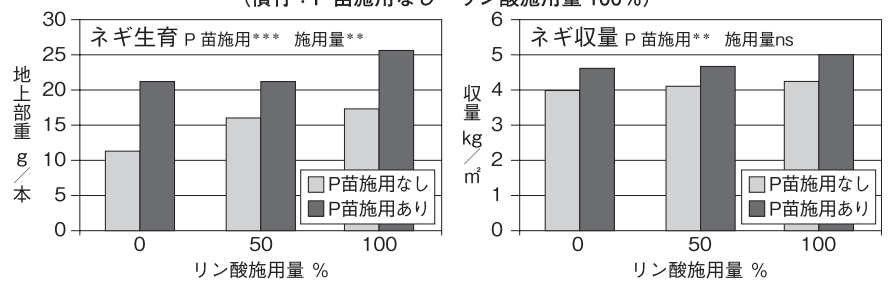
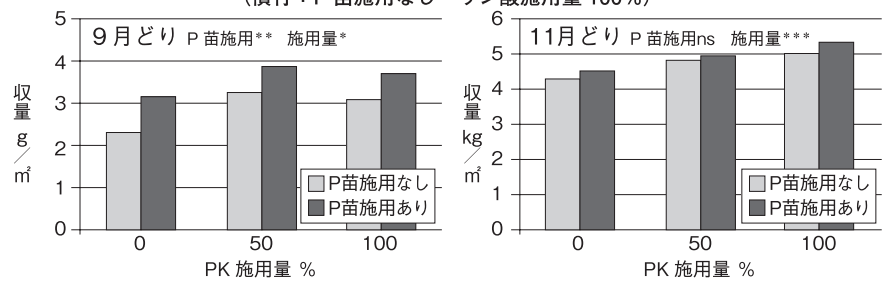


図2 定植前リン酸苗施用の効果に及ぼす作型とPK施用量の影響 (慣行:P苗施用なし・リン酸施用量100%)



とで、L規格の割合が増加するなど、量だけでなく、質的なメリットもあるとしている。経済性を試算すると、収入は10a当たり12万～18万円増加し、ほ場へのリン酸肥料を50%削減すれば、

肥料費は10a当たり6000円節減され、労働時間増、資材費を十分補てんできるとしている。

詳しくは、同センターのホームページを参照のこと。

花冠取り器が有効
ブドウのさび果対策

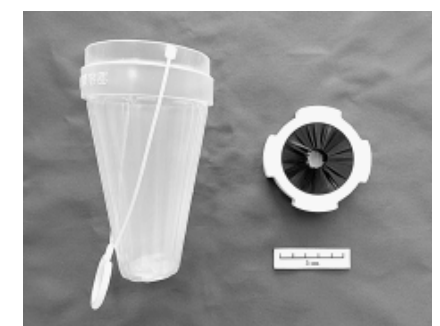
ブドウ栽培では、花冠が開花後の子房に長く付着した場合、灰色かび病菌の二次感染やさび果の原因になる。防除法として、ジベレリン処理と同時に簡便に花冠(主に花冠)を落とせるブドウ花冠取り器がある(写真)。ブラシ素材はクロロプレ

農研機構果樹研究所は、開花後の

花冠が極めて離脱しにくく、さび果が生じやすい品種「サンヴェルデ」で、さび果の軽減効果を検討した。

満開期の第1回ジベレリン処理時にジベレリン溶液に花穂を浸漬すると同時に、ブラシで花冠をこすり落とす。花穂がブラシ部に通過する際の抵抗は少なく、容易にジベレリン処理と花冠

落としが実施できる。カップのみを用いてジベレリン溶液に花穂を浸漬しただけでは、処理3日後の花冠の落下率は36%、10日後で87%、さび果発症度は48%である一方、花冠取り器を用いると、それぞれ87%、



㊦浸漬用カップ ㊦ブラシ部

98%、32%となり、使用直後の落花はほとんどなく、ブラシ処理に起因した傷は観察されないことから、さび果の軽減効果が認められた。

なお、花冠取り器は今春より販売されている。

長野県野菜花き試験場
罹病残茎・発病茎拔取りが有効
露地アスパラガス茎枯病防除

長野県野菜花き試験場は、「露地栽培のアスパラガスに発生する茎枯病防除のための体系防除プログラム」を作成した。同病が多発すると、茎枯れ～黄化～乾燥枯死に至るため、株の茎立本数が極端に少なくなる。その後、株全体が弱まり、欠株に陥り、ほ場中で散見されるようになり、収量が激減してしまう。

春の収穫前

(1) 前年の残さの処理処分

前年に刈り払った残さなどが、ほ場の隅に放置されてはいないか確認する。

(2) 畦面の罹病残茎処理処分

露地栽培においては必須作業。大型パーナーにより畦面(罹病残茎)を火炎焼却処理でも可能。

立茎開始直前

(1) 罹病残茎の抜き取り回収と処分 前年の罹病残茎および当年春収穫後の残茎に形成された茎枯病菌の黒いつ

ぶつぶ状の柄子殻が伝染源のため、こまめにほ場内を歩き、手で抜き取る。

(2) 地表面での残茎刈り払いと畦面への盛り土

伝染源である残茎を埋没するため、萌芽前に土壌で地表面を5cm程度覆う。

立茎開始後

(1) 薬剤散布

露地のアスパラガスでは、茎枯病に対する薬剤の防除効果に差があるため、立茎開始時期は「最重要防除時期」のため、使用する薬剤も効果の高い剤を用いる必要がある。

(2) 畦面および通路への敷きワラ被覆

降雨による泥はねなどを防止するために、ワラなどにより畦面、通路を被覆する。

(3) 立茎数の整理による株元の通風確保

株元の通風を良くするため、適正な立茎数を維持し、過繁茂としない。

株養成時期

(1) 定期的な薬剤散布

薬剤防除は、秋雨期も重要なので、7～10日ごとに薬剤散布を行う。

(2) 発病茎の抜き取り・ほ場外への持ち出し

こまめに畑を観察し、発病茎葉を見つけ次第除去し、ほ場外で処分する。

(3) 夏秋芽の収穫

夏秋芽の収穫は、有効な耕種防除法。萌芽直後の柔らかい若茎の表皮は、茎枯病菌にとって格好の獲物なので、夏秋期(夏芽)の収穫をできる限り実施する。

株養成終了後

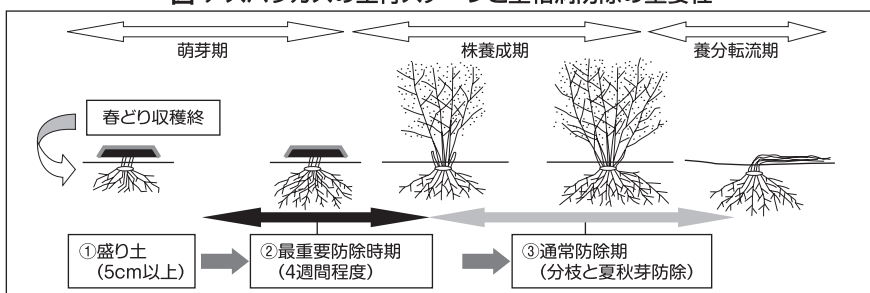
地際からの刈り払いと残さのほ場外への持ち出し処分を行う。伝染源をほ場内に残さないように、できるだけ刈り取った残さをほ場外へ運び出す。

まとめ

茎枯病が多発しているほ場では、春どり収穫終了後の盛り土と立茎開始直後に防除効果の高い薬剤を散布する体系を実施する必要がある(図)。

詳しくは、同試験場のホームページを参照のこと。

図 アスパラガスの生育ステージと茎枯病防除の重要性



開拓農家訪問

北海道天塩郡豊富町 (有)さくら牧場



北海道天塩郡豊富町は道内の北部に位置し、雄大なサロベツ原野と四季折々の変化に富んだ利尻富士を眺望でき自然に恵まれている。同町内は酪農が盛んで、乳牛飼育頭数は人口の4倍の1万6000頭、出荷乳量は年間7万2000tと道内でも上位にある。

豊富町は、1903年(明治36)に開拓入植が始まり、戦後、45年(昭和20)、大阪から同町内に4戸が入植したのを皮切りに、47年には、山形県庄内地方出身の満州開拓引揚者27戸が入植するなど、合計で76戸が入植した。

酪農経営を営む岡本健吾さん(36歳)の祖父、春吉さん(故人)は、48年、35歳の時に、満州国開拓団からシベリア抑留生活を経て、故郷である山形県東田川郡(現在の酒田市)に戻るが、引揚者が500万人にも及んだため、耕作地不足解消を目的に、翌年には庄

内開拓団として豊富町内に開拓入植した。当時は、明治末期の開拓者が撤退した土地の配分を受け、開墾に従事した。

60年頃までは、開墾された土地でパレイショなどを生産していたが、寒地農業を確立するため、気候風土に適した酪農の営農に専念した。始めた当初は、周りの仲間と支え合いながら、牛の育て方から一緒に覚え、飼料作りから搾乳まで、仕事の内容は多岐にわたったという。

2代目の父、金男さんは、74年(昭和49)の24歳の時に家業を引き継いだ。2000年には、農業生産法人として「有限会社さくら牧場」を設立。社名にある「さくら」は、「安全・安心」で「品質の高い」牛乳を、「牧場」から届けたいという思いから来ており、英語で各々を意味する「SAFETY、QUALITY、RANCH」の頭文字を取った

3代目で獣医師の健吾さん 牛の健康維持し乳量安定保つ



「SAQURA」から、名付けられた。

3代目となる健吾さんは、14年7月に代表取締役役に就任し、元々幼少時から家業を継ぐと決めていたという。

現在、同社の1頭当たりの年間搾乳量は9900kgほどで、搾乳牛330頭、育成牛270頭、草地面積250ha程度を保有し、家族4人と社員3人の他に、ベトナムなどの海外の研修生とともに管理している。

同社は、乳牛の排泄物を発酵・乾燥させる「戻し堆肥」施設を導入し、排泄物を排出しただけでなく、牛舎の床材として利用し、循環型農業を実現している。

獣医師の健吾さんは、牧場にクリニックを併設し、普段から牛の健康



写真上⑤=左から(有)さくら牧場の岡本金男さん、岡本健吾さん、⑥パーラーで搾乳作業する従業員の方々
同下=豊富町内から見た利尻富士

を保つため、飼育環境、搾乳の時間帯、牛のストレス要因などについて、日々新しい酪農技術の習得と実践を通して、安定した乳量と品質の生産を心掛けている。

近年、同町内の酪農家戸数がしだいに減少している。さくら牧場は町全体の乳量を維持するため、安定的な乳生産に努めながら、経営規模の拡大を図りたいという。

分娩前後の栄養管理が重要 乳牛 周産期疾病の予防策

家畜衛生フォーラム2014

日本家畜衛生学会は11月28日、「家畜衛生フォーラム2014」を都内で開催した。牛、豚、馬および鶏における疾病の現状と課題に関する講演が各々の有識者によって行われた。佐藤繁岩手大学教授は、「牛疾病の発生状況および予防対策の現状と課題」と題し、最近の疾病発生状況や周産期疾病などの予防対策の現状と課題を中心に講演した。

09～11年度の家畜共済統計によると、乳牛の病傷事故の多発疾病は、乳房炎、繁殖障害(黄体遺残、卵巣静止)、肺炎、腸炎、乳熱の順に多く、死亡・廃用事故は、胎子異常、心不全、乳房炎、脱臼、関節炎、腸炎の順となっている。

農水省によると、炭疽や結核病は清浄化が進んだが、ヨーネ病は依然として全国で発生している。最近では、乳牛、肉牛ともに牛白血病の発生が増加し、経済的被害が大きいことから、病原体の農場への侵入リスクを減らし、農場

内でのまん延リスクを減らすための防除対策が急がれている。

周産期疾病は、乳牛の分娩前後にみられる種々の疾病の総称。難産や子宮捻転、子宮脱などの分娩と関連した疾病のほか、乳熱などの起立不能症、第四胃変位などの代謝病、乳房炎などの感染症などが含まれる。

周産期疾病の発生は、分娩前後の乾物摂取量の低下、栄養バランスが崩れたことによる第一胃機能の低下、低カルシウム血症および免疫機能の低下などの要因が密接に関連している。栄養管理と関連した第一胃機能の変化が重要な要因で、移行期での給与飼料構成の変化により、第一胃内環境が大きく変化し、急激な飼料切り替えなどにより、一時的なアシドーシスに陥る。

また、妊娠後期には、胎児や子宮の栄養要求が増大する一方、特に分娩前後には乾物摂取量が低下する。分娩後には、泌乳のために栄養要求が増大する一方、乾物摂取量の増加が遅延する

ため、分娩前後の栄養要求と乾物摂取量のアンバランスが最大の発生要因となる。

周産期疾病の予防は、乾乳期や移行期における栄養管理の改善を主体とし、各疾病の予防対策を実施することが基本。栄養管理の改善は、泌乳量の

増加や繁殖成績の向上などにも効果がある。泌乳後期・乾乳期から泌乳初期・最盛期での栄養管理、特に適正範囲内のBCSを維持し、分娩前後の乾物摂取量低下を最小限にするための栄養管理が重要となるとしている。

抗体陽性牛の把握を 牛白血病の対策

牛白血病の発生は年々全国で増加傾向にあり、同病ウイルスの抗体陽性牛も増えてきている。近年、比較的若い牛などでの発症が屠場で摘発されるケースも多く確認され、大きな問題になっている。同病の対策を、愛知県東部家畜保健衛生所の「家畜衛生情報」から紹介する。

感染した牛は生涯ウイルスを体内に持ち続けるため、他の牛への感染源となる。また、ウイルスは感染牛の血液や乳汁に含まれているため、感染していない牛がこれらに接触しないようにする。

主な対策としては、①抗体陰性

牛は抗体陽性牛と距離を離して飼養することで感染を防ぐことができる。検査を行い、牛舎内の抗体陽性牛を把握することが大切。②できるだけ陽性牛の初乳等を子牛に給与しないようにする。やむを得ず利用する場合は、初乳を凍結してから使用、パステライザーなどで加温してから使用、あるいは代用乳を利用するなどして、陽性牛の乳から子牛への感染を防ぐよう努める。初乳を凍結させる場合は、深部まで完全に凍結させる、加温させる場合は60℃で30分を目安に行う。③抗体陽性牛は生涯ウイルスを体内に持ち続けるため、陽性牛は優先的な更新を検討する。④血液を介して感染が広がるので、防虫ネットや忌避剤、殺虫剤、アブトラップ等を活用して吸血昆虫対策にも努めることが重要となる。

13年度畜産物生産費 全畜種で増加続く 飼料費の上昇が大きく影響

農水省はこのほど、「13年度畜産物生産費」を公表した。それによると、1頭当たり資本利子・地代全額算入生産費(以下、全算入生産費)は、配合飼料価格の高騰などにより、搾乳牛、肉用牛、肥育豚の全畜種で前年度に比べ増加した。1経営体当たり肉用牛・肥育豚販売頭数は、交雑種育成牛以外の全畜種で前年度並みまたは前年度に比べ増加した。全畜種で販売価格が増加したが、配合飼料などの飼料費を抑えることが依然として大きな課題となっている。

搾乳牛

搾乳牛通年換算1頭当たり全算入生産費は75万3535円(前年度比2.1%増)で、生乳100kg当たり(乳脂肪分3.5%換算乳量)全算入生産費は8247円(同2.0%増)となった。飼料価格の上昇により飼料費が7.3%増加したことなどが影響し、全算入生産費が増加した。3.5%換算乳量は、前年度比0.2%増の9137kg、100kg当たり乳価は8311円で、前年度に比べ1.5%増加した。

1経営体当たり搾乳牛飼養頭数は50.4頭で、前年並みとなった。

乳用雄育成牛

乳用雄育成牛1頭当たり全算入生産費は14万6785円(同11.4%増)となった。子牛導入費が増加したことや、配合飼料価格の上昇により飼料費が9.8%増加したことなどが影響し、全算入生産費が増加した。

1経営体当たり販売頭数は、前年度比1.0%増の395.3頭。販売価格は、14万5390円で、前年度に比べ32.7%増加した。

乳用雄肥育牛

乳用雄肥育牛1頭当たり全算入生産費は43万2556円(同4.5%増)となった。配合飼料価格の上昇により飼料費が9.6%増加したことなどが影響し、全算入生産費が増加した。

1経営体当たり販売頭数は、前年度比17.3%増の131.6頭。販売価格は35万3521円で、前年度に比べ15.0%増加した。

交雑種育成牛

交雑種育成牛1頭当たり全算入生産費は25万8280円(同16.2%増)となった。素牛導入費が20.9%増加したこと

新マルキン14年10月分 交雑種・乳用種で発動

農畜産業振興機構は、14年10月分の肉用牛肥育経営安定特別対策(新マルキン)事業の補てん金単価(概算払)を公表した。交雑種と乳用種

や、配合飼料価格の上昇により飼料費が6.2%増加したことなどが影響し、全算入生産費が増加した。

1経営体当たり販売頭数は、前年度比18.5%減の164.8頭。販売価格は28万1517円で、前年度に比べ27.5%増加した。

交雑種肥育牛

交雑種肥育牛1頭当たり全算入生産費は68万8499円(同0.3%増)となった。配合飼料価格の上昇により飼料費が9.4%増加したことなどが影響し、全算入生産費が増加した。

1経営体当たり販売頭数は、前年度比13.3%増の76.9頭。販売価格は60万8814円で、前年度に比べ13.0%増加した。

去勢若齢肥育牛

肉専用種の去勢若齢肥育牛1頭当たり全算入生産費は93万8404円(同3.1%増)となった。配合飼料価格の上昇により飼料費が8.7%増加したことなどが影響し、全算入生産費が増加した。

で補てんが行われる。1頭当たり補てん金単価は、交雑種が2万9600円、乳用種が6万300円となった。

前回に比べ、交雑種は枝肉価格などの上昇により粗収益が回復したため3万2400円減。乳用種も同様に粗収益が回復したため5100円減となった。

1経営体当たり販売頭数は、前年度比5.2%増の40.1頭。販売価格は90万7897円で、前年度に比べ8.6%増加した。

肉専用種子牛

肉専用種子牛1頭当たり全算入生産費は59万2996円(同3.6%増)となった。配合飼料価格の上昇により飼料費が9.9%増加したことなどが影響し、全算入生産費が増加した。

1経営体当たり子牛販売頭数は、10.2頭で前年度並み。販売価格は48万3432円で、前年度に比べ20.1%増加した。

肥育豚

肥育豚1頭当たり全算入生産費は3万3971円(同5.4%増)となった。飼料価格の上昇により飼料費が7.6%増加したことなどが影響し、増加した。

1経営体当たり販売頭数は、前年度比6.7%増の1514.8頭。販売価格は3万3343円で、前年度に比べ13.5%増加した。

区 分	搾乳牛(1頭当たり)		乳用種(1頭当たり)				交雑種(1頭当たり)				肉専用種(1頭当たり)				肥育豚(1頭当たり)	
	金額(円)	前年比(%)	金額(円)	前年比(%)	金額(円)	前年比(%)	金額(円)	前年比(%)	金額(円)	前年比(%)	金額(円)	前年比(%)	金額(円)	前年比(%)	金額(円)	前年比(%)
物財費	636,843	4.3	136,925	12.5	406,609	5.1	240,109	15.5	636,593	1.0	376,129	4.8	853,714	3.4	29,959	6.8
うち素畜費			46,525	25.5	110,523	△1.0	142,902	20.9	258,012	△8.2			457,457	0.5	25	△56.9
飼料費	380,092	7.3	71,162	9.8	259,664	9.6	76,473	6.2	327,060	9.4	208,274	9.9	324,806	8.7	22,854	7.6
労働費	159,746	△0.4	9,802	1.4	23,148	△6.5	15,880	2.5	41,953	1.6	171,023	△0.2	71,241	△0.7	4,024	△2.2
費用合計	796,589	3.4	146,727	11.7	429,757	4.4	255,989	14.6	678,546	1.0	547,152	3.2	924,955	3.0	33,983	5.6
生産費(副産物価格差引)	714,090	2.2	144,228	11.7	424,987	4.6	254,042	15.8	672,662	1.0	520,294	3.7	915,518	3.2	33,170	5.6
全算入生産費	753,535	2.1	146,785	11.4	432,556	4.5	258,280	16.2	688,499	0.3	592,996	3.6	938,404	3.1	33,971	5.4
1経営体当たり販売頭数			395.3	1.0	131.6	17.3	164.8	△18.5	76.9	13.3	10.2	0.0	40.1	5.2	1,514.8	6.7
1頭当たり投下労働時間	104.68	△0.3	6.48	1.4	15.71	△7.0	10.86	2.2	27.59	1.0	125.12	△2.0	49.29	△3.2	2.69	△1.8

富山県農林水産総合技術センター畜産研究所 大麦わらサイレージで利用可能 採食性・消化率に遜色なし

飼料自給率向上や安全性の観点から、購入粗飼料から自給飼料への転換は喫緊の課題となっている。転作作物として大麦も広く栽培されているが、大麦わらは殆んど利用されていない。大麦わらを飼料として利用できれば飼料自給率の向上や飼料コスト低減が図れると考えられる。

富山県農林水産総合技術センター畜産研究所では、黒毛和種に大麦わらサイレージを給与し、採食性、消化率に関する試験を行い、乾草稲わらや生稲わらサイレージと遜色なく、粗飼料として給与することが可能であることを実証した。

採食性に関する試験は黒毛和種肥育

牛3頭を用いて、濃厚飼料と大麦わらサイレージを給与する「大麦わら区」、濃厚飼料と生稲わらサイレージを給与する「生稲わら区」、濃厚飼料と乾草稲わらを給与する「乾草わら区」の3区を設定し、1期14日間(馴致期10日間、試験期4日間)を試験期間とし、3×3ラテン方格法で実施した。調査項目は、乾物摂取量とした。

試験の結果、濃厚飼料と粗飼料の合計乾物摂取量は、「大麦わら区」が8.78kg、「生稲わら区」が8.65kg、「乾草わら区」が8.66kgとなり有意な差は認められなかった。粗飼料のみの摂取量も、「大麦わら区」が0.53kg、「生稲わら区」が0.49kg、「乾草わら区」

が0.48kgとなり、有意な差はなかった(表1)。大麦わらサイレージの乾物摂取量は、生稲わらサイレージや乾草稲わらと同等であり、採食性に差がないと考えられた。

消化率に関する試験は黒毛和種雌牛2頭を用いて、1期14日間(馴致期10日間、試験期4日間)を試験期間とし、第1期にハイキューブの単独給与、第2期にハイキューブの3分の1を大麦わらサイレージで代替して給与を行い実施した。試験方法は、全糞採取法で行った。調査項目は、一般成分{CP(粗蛋白質)、EE(粗脂肪)、NFE(可溶無窒素物)、CF(粗繊維)}の消化率、TDNとした。

試験の結果、大麦わらサイレージの消化率について、CPについては、その含量が少なく、内因性窒素の排せつ等の影響によりCPの消化率がマイナ

表1 採食量調査における乾物摂取量

	乾物摂取量(kg)		
	濃厚飼料	粗飼料	合計
大麦わら区	8.25	0.53	8.78
生稲わら区	8.16	0.49	8.65
乾燥わら区	8.17	0.48	8.66

表2 大麦わらサイレージの見かけの消化率とTDN

	消化率(%)				TDN(DM%)
	CP	EE	NFE	CF	
大麦わらサイレージ	0.00	57.4	48.1	61.1	49.5
稲わら	26.0	45.0	49.0	57.0	42.8
生稲わらサイレージ	37.0	50.0	45.0	58.0	42.9

※日本標準飼料成分表より
スの値となったため、消化率を暫定的に0とした。その他の消化率はEEが57.4%、NFEが48.1%、CFが61.1%であった。TDNは49.5%となった。消化率は、生稲わらサイレージや乾草稲わらと比較してCP以外は同程度であり、TDNは高くなった(表2)。同研究所は、今後、乳酸菌製剤を添加した大麦わらサイレージの消化率や採食性を調べるとしている。

畜産物需給見通し

牛枝肉

年末年始の手当で需要増、高値での展開か

11月は、お歳暮シーズンを迎えたほかに、共助会が数多く開かれた。さらに、全品種の出荷頭数が前年同月に比べ減少したことや円安の影響で輸入牛肉が高値で推移したことなどから、全品種の相場は強もちあいの展開となった。和牛では3～5等級の価格差が縮まった。

【乳去勢】11月の大阪市場乳去勢牛税込み平均枝肉単価は、B3が1028円(前年同月比114%)、B2は966円(同111%)となった。前月に比べそれぞれ96円、90円上げた。

農畜産業振興機構は、12月の乳用種牛(雌含む)の全国出荷頭数を3万3100頭(同98%)と見込んでいる。12月の牛肉輸入量は、4万1300t(同106%)、うち冷蔵品1万8500t(同94%)、冷凍品2万2800t(同119%)と予測している。

【F₁去勢】11月の東京市場F₁去勢牛税込み平均枝肉単価は、B3が1406円(前年同月比106%)、B2は1316円(同107%)となった。前月に比べそれぞれ27円、29円上げた。

農畜産業振興機構は、12月の全国出荷頭数を2万2200頭(同97%)と予測している。

【和去勢】11月の東京市場和去勢牛税込み平均枝肉単価は、A4が2154円

(前年同月比106%)、A3は2009円(同108%)となった。前月に比べどちらも72円上げた。

農畜産業振興機構は、離農の進行などにもない、出荷頭数の減少が継続し、12月の全国出荷頭数を5万4000頭(同99%)と予測している。

全品種合計の出荷頭数は、前年同月を2%下回ると予測している。

本格的な寒冷期を迎えて、鍋物需要が活発になると見込まれる。クリスマスなどの年末商戦や年始用の手当などで最需要期を迎える。

焼き材需要は依然として安定して推移し、ロイン系などの高級部位の需要も強まると予想される。前月に引き続き、全品種の出荷頭

数が前年同月を下回ると予測されていることなどから、相場は高値での展開が見込まれる。ただ、年末年始用手当て後は、下げもあるか。

よって、向こう1ヵ月の相場は、大阪市場の乳去勢税込み平均枝肉単価は、B3が950～1000円、B2は850～900円。東京市場の税込み平均枝肉単価は、F₁去勢B3が1350～1450円、B2は1200～1300円、和去勢A4が2050～2150円、A3は1900～2000円での展開か。

11月の子牛取引状況 (単位：頭、kg)

ブロック名	品種	頭数		重量		1頭当たり金額		単価/kg	
		当月	前月	当月	前月	当月	前月	当月	前月
北海道	乳去	425	509	283	291	150,010	139,409	530	479
	F ₁ 去	1,383	1,264	306	306	398,338	371,094	1,302	1,213
	和去	1,652	1,718	303	305	619,044	605,056	2,043	1,984
東北	乳去	3	-	173	-	41,760	-	241	-
	F ₁ 去	30	20	290	293	337,931	309,096	1,164	1,056
	和去	2,318	2,151	300	302	635,396	617,792	2,117	2,049
関東	乳去	16	10	276	231	110,093	77,976	400	337
	F ₁ 去	228	218	298	291	346,354	332,665	1,164	1,143
	和去	672	940	275	274	624,449	592,488	2,270	2,163
北陸	乳去	-	-	-	-	-	-	-	-
	F ₁ 去	-	-	-	-	-	-	-	-
	和去	90	1	256	124	591,527	400,680	2,309	3,231
東海	乳去	31	32	301	293	161,024	148,331	535	505
	F ₁ 去	60	103	299	302	331,344	320,906	1,108	1,063
	和去	437	233	266	261	619,423	595,752	2,329	2,285
近畿	乳去	-	-	-	-	-	-	-	-
	F ₁ 去	-	-	-	-	-	-	-	-
	和去	520	422	259	252	786,715	774,940	3,037	3,078
中四国	乳去	77	134	266	283	167,498	169,536	630	598
	F ₁ 去	217	262	287	290	350,522	324,898	1,222	1,120
	和去	557	873	205	228	589,476	556,655	2,869	2,445
九州・沖縄	乳去	26	32	290	294	146,755	135,337	506	460
	F ₁ 去	323	393	294	292	346,944	313,985	1,181	1,076
	和去	9,708	7,402	278	281	610,917	586,140	2,198	2,086
全国	乳去	578	718	281	288	151,117	144,279	538	501
	F ₁ 去	2,241	2,260	301	300	378,409	349,265	1,257	1,164
	和去	15,954	13,740	283	285	620,990	597,970	2,194	2,098

注) (独)農畜産業振興機構の公表データを基に本紙集計、当月は暫定値。価格は消費税込み、重量・金額・単価は加重平均。-は上場がなかったことを示す。関東ブロックは山梨県、長野県、静岡県を含む。

十分な加熱・健康管理が重要 ノロウイルス食中毒の予防策

関東農政局と日本食肉消費総合センターは12月3日、14年度食肉情報出張講座を都内で開催した。品川邦汎岩手大学名誉教授による食肉の衛生管理の講演などが行われた。食中毒をテーマに、中でもノロウイルスの話題が中心となった。

ノロウイルスの特徴は、抵抗力が強いこと、エタノールが効きにくく、乾燥状態では比較的長期間感染性を保持する。60℃で30分間加熱しても感染性がある。低温であるほど安定するため冬期に多発する。感染力が強く、10～100個程度でも乳幼児から高齢者まで感染・発病する。



豚枝肉

出荷頭数減少で国産の引き合い強まり、堅調か

11月の東京市場税込み平均枝肉単価は、上物が594円(前年同月比122%)、中物は575円(同123%)となった。前月に比べそれぞれ61円、58円上げた。豚流行性下痢(PED)の影響が本格化したことなどにより、取引頭数が減少し、高値の相場となった。

農水省食肉鶏卵課によると、全国出荷頭数を12月は143万3000頭(同92%)、1月は140万頭(同96%)と予測している。6ヵ月前の豚流行性下痢発生の影響で、引き続き前年同月を下回って推移すると見通している。

主な症状としては、小腸の炎症による下痢、腹痛、突然の嘔吐など。そのほかに、発熱、筋肉痛、頭痛もある。12～72時間の潜伏期間があり、治癒までに1～3日ほど要し、後遺症は残らない。

感染経路は、汚染された食品や水の摂取、人から人の接触・飛沫感染などがある。

予防の際には、持ち込まない、広げない、付けない、加熱することを心がけることが重要だとしている。調理の際は、中心部までを85～90℃、90秒以上かけて加熱すること。

注意点としては、調理する前に丁寧に手洗いを行うこと。嘔吐、下痢の症状を有する時には調理しないことが望ましい。なお、感染しても症状が出ていないこともあるため、食肉を扱う人の健康管理も重要としている。

農畜産業振興機構は、12月の輸入量を6万2300t(同99%)、うち冷蔵品2万4900t(同92%)、冷凍品3万7400t(同105%)と予測している。生産・輸入の出回り量は、前年同月をやや下回って推移すると予測されている。

年末年始の需要で消費が活発になると見込まれる。また、牛肉の価格が上昇しており、代替需要も予想される。全国出荷頭数が減少し、輸入量がほぼ前年並みの予測であるため、国産豚肉の引き合いは強まり、堅調な相場で展開することが予想される。

よって、向こう1ヵ月の東京市場税込み平均枝肉単価は、上物が600～630円、中物は560～590円での展開か。

素牛

品薄感続く中、需要が高まり相場は高値基調か

【乳素牛】11月の素牛価格(左表)の全国1頭当たり税込み平均価格は、乳去勢が15万1117円(前年同月比109%)、F₁去勢が37万8409円(同106%)となった。前月に比べ乳去勢は6838円、F₁去勢は2万9144円上げた。引き続き素牛不足が継続し、集荷数量が少なく、総じて強含みとなった。

素牛集荷は前月並みが見込まれるものの、依然として頭数不足が予想され、相場はもちあいが予測される。

【スモール】11月の北海道主要市場1頭当たり税込み平均価格は、乳雄が3万7946円(前年同月比105%)、F₁雄が16万2205円(同89%)となった。前月に比べ乳雄は4124円上げ、F₁雄は514円下げた。取引頭数は、乳雄、F₁雄ともに前月に比べ減少しており、それぞ

れ前月比93%、89%となった。前年同月比では86%、115%。両品種とも先月に比べ取引頭数が減少したことから、相場がもちあいで推移した。

今後も、スモールの品薄感は続くことが見込まれ、両品種とも引き合いが強くなることを予想されることから、相場は強もちあいで推移するか。

【和子牛】11月の和去勢価格(左表)の全国1頭当たり税込み平均価格は、62万990円(前年同月比110%)で、前月に比べ2万3020円上げた。素牛の絶対量不足が続く中、年末の牛肉需要で出荷を増やした肥育農家の空き牛舎への導入など調達シーズンに入り、需給が一段とひっ迫し高値となった。

異常な高値に成牛出荷時の逆ザヤ懸念はさらに高まっているが、肥育農家の空き牛舎への導入意欲がさらに強まることが予測され、相場は高値堅調に動くか。